広報飯山

令和元年 9 月号 別冊

September,2019 No.258

特集 雪国から甲子園へ

朝日新聞社提供

「雪国から甲子園へ」

この一帯で野球に携わる方たちの合言葉です。雪の深い飯山。雪をものともせず、その言葉のとおり甲子園出場を果たした飯山高校野球部。選手たちがこの地域に与えたもの、この経験を通して感じたことについて特集します。

新たな時代の幕開けとなった令和元年。

第101回全国高等学校野球選手権大会で飯山高校野球部が長野大会を制し、阪神甲子園球場での全国大会に出場しました。選手が履くストッキングにデザインされた3本の線。これは、飯山北、飯山南、飯山照丘高校が統合してできた証。全学校が統合してから3年、甲子園の長い歴史に「飯山」の名を初めて刻みました。

長野大会では、ノーシードからのスタートだった飯山高校野球部。先制点をとる攻撃スタイルで強豪校を次々と破り、見事優勝を果たしました。この活躍に応え、準決勝、決勝と、飯山市は応援バスを運行し、応援団を送りました。甲子園での全国大会出場を飯山高校の正門前で立派に報告する選手たちに、出迎えた方の中には、涙を流し、抱き合い喜ぶ姿がありました。

地域がひとつになる

甲子園での全国大会出場を決めたことで、市内はもちろん、飯山高校に関係するすべての地域が活気づきました。JR飯山駅や北飯山駅、県道の電光掲示板には、「甲子園出場おめでとう」などと表示されたほか、商店などでは、優勝にちなんだサービスや横断幕が設置されました。また、市は市役所、飯山駅に懸垂幕を設置し、ポスターを作成し、商店、事業所などに掲示してもらうなど、地域全体でこの快挙を祝いました。

甲子園での球児たちの活躍をアルプススタンドで応援したいという人が多く、飯山高校甲子園出場実行委員会で予定されていた一般販売分のチケットが3時間で売り切れました。8月9日に行われた甲子園での試合には、大型バスおよそ70台が甲子園に向けて出発し、この他にも個人、グループで甲子園に駆け付けるなどし、アルプススタンドだけでなく、外野席まで多くの方が、飯山高校の名のもとに集まり、大応援団となりました。

私立高校が全盛期の中、戦い抜いた。
本気で努力すればできることを
生徒たちは学んだ。

飯山高校野球部
吉池　拓弥 監督
Takumi Yoshiike

上田市丸子出身。体育科教師。現役時代は外野手で、丸子修学館2年生当時の2008年に選抜高校野球大会の初戦（智辯和歌山戦）に出場。飯山高校に3年前に赴任、2年間野球部長を務め、昨年10月から監督に就任。

「皆さんから多くの応援や支援をいただきました。言葉では言い表せません。」と感謝の気持ちを語る吉池監督。8月10日に飯山高校正面玄関前で行われた報告式には、出発式より多くの方が出迎えてくれ、胸がいっぱいになったといいます。また、甲子園からの帰り道では、静間バイパスから選手を乗せたバスに向かって手を振り「ありがとう！」という声が沿道から聞こえるなど、それは飯山高校まで途切れることはなかったそうです。「大敗したにも関わらず、声をかけていただきました。この地域の温かさを感じました。僕らも皆さんのおかげで感動をいただきました。こちらこそありがとうと言いたいです。」と語りました。

冬場、外で練習できない歯がゆさ、春の大会での初戦敗退など苦しい時期をチームで乗り越えてきたことがチームに「粘り強さ」を与えたと話します。また、この長野大会の前に行った、ベンチ入りできなかった部員の引退試合では、その部員たちが最後の最後にホームランを打つなど大活躍し、普段出せなかった力を発揮したといいます。今日で終わりになるという「負ける覚悟」が大切だと学んだといいます。この快挙には、この「粘り強さ」と共に「負ける覚悟」があったからだと吉池監督は語ります。

「甲子園を通して、自分を犠牲にして人のために尽くすことや、目に見えない優しさを生徒たちは感じ取ったと思います。また、私立高校が全盛期の中で、公立高校で戦い抜いた。これから先、本気で努力すればできるということを生徒たちは学んだと思います。」と生徒たちへの思いを語りました。

飯山高校の名のもとに地域が一体となり応援

飯山高校甲子園出場実行委員会
関　保典 会長
Yasusuke Seki

銀世界を思わせる白一色のアルプススタンド、地域が一つになれた証。気持ちに応え一生懸命プレーしてくれた

「まず、飯山高校野球部が甲子園に行くにあたり、皆さまに物心両面で、選手たちに応援いただき感謝したい。」と語る関会長。平成28年1月に飯山南、飯山照丘、飯山北高校の同窓会が一つになった「桂雪会（けいせつかい）」の会長を昨年から務めていることから、この飯山高校甲子園出場実行委員会の会長として尽力されました。

優勝が決まり、準備を進める中で、「練習期間も含めなるべく多くの選手に経験をさせてやりたい」「生徒や保護者の応援したいという気持ちを無駄にしない」などいろいろな思いが問題となってでてきたと言います。このような問題に対し、関会長は、「皆さまの貴重なご寄付やご協力によりすべて叶えることができました。」と胸をなでおろしました。

「当日は、飯山高校にゆかりのある方々が集まり、アルプススタンドは白一色となり、甲子園まで多くの方に来ていただきました。これらは、地域が一つになれた証。選手たちも、ご協力いただいた地域の皆さまの気持ちに応え、一生懸命プレーをしてくれた。これを一つのバネとし、飛躍してくれればいい。」と目を細めました。

飯山高校の野球部だけでなく他の生徒たちも頑張っていると語ります。「スキー部は、インターハイのクロスカントリーリレーで男女ともに優勝。男子は3年連続で総合優勝を果たしている。また、今回応援に協力いただいた吹奏楽部は、野球部を応援する中で、長野県大会を勝ち抜き、東海大会に進出するという快挙を遂げた。」と生徒たちの功績を称えます。「野球も含め、これらは教育の一環。全国大会を体験し、子どもたちには大きくなってほしい。」と思いを語りました。

飯山高校の生徒を対象とした甲子園行きのバス16台が待機している城山下駐車場。この他、県内各地から甲子園に向けて出発しました。（試合前日の8月8日夜）

飯山市文化交流館なちゅらで行われたパブリックビューイングでは、満員の大ホールから、熱い声援が送られました。試合が終わると、会場からは「感激した。楽しむ野球がチームワークにつながったのだと思う。」「試合には負けてしまったが、感動をありがとう。胸を張って帰ってきてほしい。」などの言葉が飛び交いました。

地域の皆さんと富倉地区活性化センター職員が企画し、同センターで行われたパブリックビューイングには、富倉出身者を含む21人が甲子園で活躍する飯山高校野球部を応援しました。参加者の中には、「おらの手ぬぐいで選手の汗、拭いてやりてぇ。」と選手たちへの思いを語る人もいました。

インタビュー 甲子園で聞きました

佐藤孝志さん（右）
＝山ノ内町＝

特別な思いで応援にきました

昭和41年に飯山北高校を卒業し、野球部でキャッチャーだった佐藤さん。以前、大川陸選手のお父さんと山ノ内で一緒に働いていました。その職場では、バスをチャーターして応援に駆け付けたといいます。「特別な思いで来た。選手たちにはよく感謝したい。」と語りました。

木内康富さん（右）
前橋隆道さん（左）
＝東京都＝

この帽子でプレー、夢のよう

飯山北高校野球部でセカンドを守っていた前橋さん。同じくショートを守っていた木内さんと応援に駆け付けました。前橋さんは、選手が身に着けている帽子とユニフォームをデザインされた方です。「この帽子をかぶりプレーしてくれる。夢のよう。」と胸の内を語りました。

野球少年にインタビュー

バッテリーで甲子園目指したい

２人のお兄さんの影響で１年生の時から野球を始めました。決勝戦と甲子園を観戦したという丸山選手。地元で出場した倉科選手を見て、かっこよかったといいます。景聖くんは、チームのキャッチャーを務めています。「今、バッテリーを組んでいるピッチャーのそうたくんと一緒に甲子園に行ってみたい。」と夢を語りました。

長峰北ユニオンズ（常盤小５年）
丸山　景聖 選手
Hiroto Maruyama

憧れの甲子園 迫力があった

小学校２年生から３つ上の兄の影響を受け野球を始めたという福田選手。甲子園で応援に参加してみて、「人も多く迫力があってすごかった。」と憧れの甲子園の様子を話してくれました。「飯山高校野球部の選手たちは、野球を続けて全国大会へ行ったのですごいと思います。野球で甲子園に行きたいです。」と憧れている様子でした。

あきつ少年野球（秋津小６年）
福田　真郁 選手
Maiku Fukuda

みんな笑顔でプレーかっこよかった

長野大会決勝と甲子園で選手たちの活躍を観戦したという中村選手。甲子園で飯山高校野球部の選手たちのプレーを見て、さらに強く甲子園に行きたいと感じたといいます。「エラーや苦しいとき笑顔でプレーしているところがかっこよかったです。特に大川選手は守備もバッティングもいいし、かっこよかったです。」と話しました。

ヤング木島（木島小６年）
中村　大河 選手
Taiga Nakamura

野球続けて甲子園目指す

小学校１年生の時からチームに所属している木村選手。現在は、ファルコンズと市選抜チームのキャプテンを務めています。甲子園で選手たちの活躍を見て、「チャンスでヒットを打つ大川選手はかっこよかった。」と目を輝かせます。「野球はチームでプレーしているところが楽しいです。野球を続けて甲子園を目指します。」と将来の目標を話しました。

飯山小ファルコンズ（飯山小6年）
木村　壮 選手
Sou Kimura

選手を支えてきた

マネージャーから見た甲子園と選手たち

選手たちの様子を書き記した飯山高校野球部ブログをご紹介します。

島﨑 穂乃実さん（左）
=Honomi Shimazaki= 飯山高校野球部３年マネージャー

鈴木 紗依さん（右）
=Sae Suzuki= 飯山高校野球部３年マネージャー

こんにちは！マネージャーの鈴木と島崎です！（中略）

スタンドを味方に

8月6日に開幕した第101回目の甲子園初出場の私たちの相手は、今大会最多出場のあの仙台育英高校さん。すごい組み合わせだな～と感じました。前日の夜、夕ご飯を食べた後、いつものようにミーティングがありました。「実力では簡単に勝てない、だからスタンドを味方に付けて圧倒しよう！それが明日の作戦だ！」

そして、いよいよ甲子園球場に。（中略）バスを降りて室内練習場へと向かいます。その時私たちが通っていった道は、飯山の応援団で溢れていました。メッセージが書かれた紙を掲げている人、手を振って声援を送ってくれる人、本当に嬉しかったです。（中略）

みんなで試合前最後のバッティング練習をして、個人の時間でさらに集中力を高めていました。そして合図がありグラウンドに向けてスタンバイ。グラウンドの中へ行くと大きな声援が私たちを包んでくれました。アルプススタンドは白！白！白！白！本当に真っ白でした。シートノックを見ていたら、なんだか胸が熱くなりました。

でも選手たちは本当に本当に必死にがんばっていました

いよいよプレイボール。あのサイレンが甲子園に鳴り響きました。守備ではストライクが入るとき、アウトを取ったとき、攻撃では塁に出たとき、ベンチもスタンドもすごい盛り上がりでした。

試合が動いたのは3回の表、飯山の攻撃です。ボールをしっかり見て、フォアボールで出塁した村松くん。その後の石澤くんが最高の送りバントをしてツーアウト、ランナー2塁で1番の大川くんに打席が回ってきます。追い込まれた後、ピッチャーが投げたボールを思いっきり打ち返します。その打球は一塁手の頭を超えてライト線のヒットに！その間、2塁にいた村松くんは一気にホームイン。狙い通り先制パンチを見せてくれました。

しかしその後は、仙台育英高校さんの勢いを止められず、どんどん点差が開いていきます。9回の表の攻撃の場面、「これが最後だ！楽しめ！」、みんな笑顔でバッターボックスに向かう選手たちを送り出していました。20対1ゲームセット。私たちの夏は終わってしまいました。

思い通りのプレーができなかった選手の悔しさは、これまでがんばってきた分、ものすごいです。しかしその中でも、ベンチから大きな声を出していたり、笑顔でプレーしようとしたり、相手の攻撃が終わらないときも必死にボールを追いかけてアウトを取りに行ったり、点差が開いていき、後半戦に入ってもベンチの中からはプラスの声が飛び出していました。グラウンドにいる選手だけではなく、アルプスにいるみんなが笑顔で輝いていました。こんなにたくさんの方々が応援に来てくれて、アルプスが白で埋め尽くされている景色を近くで見ることができてとても感動しました。苦しいときも笑顔で諦めずに最後まで声を出してメガホンを叩いてくださった皆さまに感謝しかありません。本当にありがとうございました。長野県代表として出場した第101回目の甲子園。大差で負けてしまい、勝つという形で、県内の野球部や周りの期待に応えることができずすみません。

今回の試合結果に対して厳しい声もありました。でも選手たちは本当に本当に必死に頑張っていました。

「飯山の人は優しいな…」

8月10日の朝、大阪の宿舎を出発して飯山へと帰りました。飯山に入ると、「道端に出てきてくれる人たちがいるから」ということで速度を落とす私たちのバス。「人、本当にいるのかな」そんな選手たちの声が聞こえてきました。でも道端には多くの人がいました。メッセージを掲げたり手を振って「お疲れさまー！」と言ってくれたり「感動をありがとう！」そんな言葉も聞こえてきました。そんな熱く、優しく、温かい、地域の皆さんがいる飯山に帰ってくると選手たちもほっとして口々に「飯山の人は優しいな…」とつぶやいていました。学校に着くとたくさんの人。その中で踊るチアガールの皆さんと、聞こえてくるGフレア。本当に皆さんの温かさを感じました。どんな結果でも私たちを見捨てず温かい声援を送ってくださった皆さんを大切にしていきたいです。本当に本当にありがとうございました。2年半、仲間思いの優しい選手たちと飯山で過ごすことが出来て幸せでした。

私たちはそんな選手たちと2年半一緒に頑張ってこれて本当に幸せです。こんなに長く一緒にいさせてくれ、元気をくれ、楽しく野球する姿を見せてくれて、本当にありがとう。（中略）

101回目の夏は終わってしまいましたが、飯山高校野球部の夏はまだまだこれからです。来年も再来年ももっともっと成長していき、「甲子園で勝つ！」この目標を必ず達成してみせます！これで3年生は引退です。これまで応援して下さったみなさん、本当にありがとうございました！感謝の気持ちでいっぱいです。そしてこれからも飯山高校野球部をよろしくお願いします！（省略）

飯山高校野球部ブログ
「ありがとうございました」より

朝日新聞社提供

1_球場のアルプススタンド入口で入場を待つ応援団　**2**_応援している野球部員と急遽ダンス同好会を中心として結成されたチアリーダー　**3・4**_飯山高校の攻撃で立ち上がって選手を応援　**5**_吹奏楽部、卒業生、みゆき野吹奏楽団などが集まり急遽結成された合同ブラスバンド。吹奏楽部は8月に行われた第59回長野県吹奏楽コンクールで優勝し、長野県代表として東海大会に出場する快挙を遂げた　**6**_試合が終了し、観客でいっぱいとなったアルプススタンドに向かってあいさつをする選手たち　**7**_8月10日甲子園からの帰り道、出迎える沿道の皆さんを見て速度を落とす選手たちを乗せたバス

甲子園出場までの軌跡

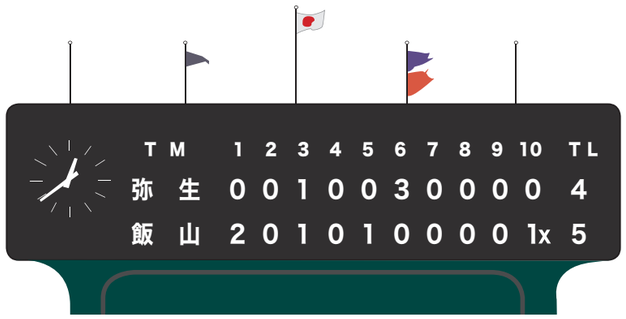
ノーシードからの戦い

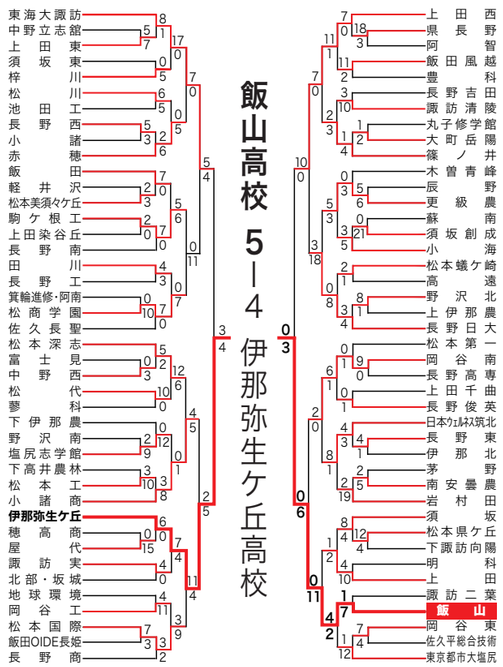
7月10日、初戦の諏訪二葉高校を7対1で破り、続く13日に行われた2回戦の東京都市大塩尻高校戦。同校は、春の大会で準優勝をしている強豪校。初回の1番主将の大川選手が、初球をセンター前にヒット、続く若林選手がセンター越えの三塁打を放ちました。小山選手も続き、2点を挙げました。2対1で迎えた6回、2アウト、2・3塁で、石澤選手がフルカウントから6球目をライト前に運び2点が入り、4対2で勝利を収めました。この勢いに乗り、続く15日に行われた3回戦では、11対0で上田高校を破り、続く4回戦は、岡谷南高校との対戦。公立高校対決を6対0で制し、10年ぶりのベスト4となりました。

20日に行われた準決勝は、優勝候補とされていた上田西高校との対戦。2回表に村松選手と石澤選手の連続2塁打で1点が入り、待望の先制点をあげました。4回表にはヒットで出塁した小林昂聖選手が2塁に進み、その後、村松選手がヒットを放ち1点を追加しました。8回表にも倉科選手を2塁において村松選手がこの日3本目となるヒットで3点目を挙げました。投げては、常田選手が7回を無失点の快投を見せ、エースの岡田選手が8・9回を抑え3対0で完封勝ちを収めました。

延長にもつれる死闘

翌日の21日に行われた決勝戦は、準決勝で東海大諏訪高校を破った伊那弥生ケ丘高校との対戦。ともに勝てば初の甲子園出場がかかる公立高校同士の決勝。スタンドは、1塁側、3塁側ともに大勢の観客でいっぱいとなりました。先制したのは飯山でした。1回裏に先頭打者の大川選手が2塁打を放ち、若林選手がバントで3塁に送ると鈴木選手が放った打球を相手のエラーで先制点。その後、鈴木選手が2塁に進塁したところで小林昂聖選手がヒットを放ち初回に2点を挙げました。飯山は、3回表に1点を失いましたが、その裏には、小山選手と小林昂聖選手がヒットでチャンスをつくり、村松選手のヒットで1点を追加しました。5回には、小林昂聖選手が内野安打で出塁し、フォアボールとデットボールで満塁となり、先発の岡田選手がタイムリーヒットでさらに1点を追加しました。6回表に3点を失い4対4の同点。ここから9回まで0を連ねた両チーム。10回裏、倉科選手がヒットで出塁し、村松選手がフォアボールを選びランナー1・2塁。石澤選手の犠牲フライで倉科選手が3塁に進み、最後は6回途中から登板し相手を抑えてきた常田選手がセンター前にサヨナラとなるヒットを放ち、長野大会で初めて優勝しました。





長野大会優勝 そして甲子園へ

第101回全国高校野球選手権大会に出場した飯山高校野球部。応援も含め、チーム一丸となり、長野県の代表となったとき、どんなことを感じ、得たものは何か。また、球児が憧れる甲子園でプレーや応援について、飯山高校野球部を代表して、3年生、大会に出場した選手、木村部長にインタビューしました。

※記載の背番号は県大会時のものです。

冬、雪で閉ざされるグラウンド その分、野球ができる楽しさを知っている。

「長野大会から甲子園まで忙しい中応援してくれた皆さまに感謝でしかありません。選手たちも支えてくださった皆さまに感謝しなくてはいけないと実感していると思います。」と木村部長。

甲子園出場が決まり、選手を落ち着かせようと、今までやってきたとおりのことを変えずにやることを心掛けること、夏の大会の長野の代表チームということを忘れず自信をもってプレーすることを選手たちに伝えてきたと振り返ります。

甲子園では、一挙手一投足に注目している多くの人の中でプレーしている選手を見て、緊張しているというより、楽しそうだったと語ります。また、木村部長は、「選手たちは皆さんの声援に応えようと一生懸命プレーしました。」と選手たちを称えました。

「飯山では、冬は雪でグラウンドが使えない。その分楽しそうに野球をやる。野球ができるという楽しさを知っているし、我慢強さがある。卒業する野球部員には、この経験を今後に役立ててほしい。」と引退する野球部員の今後の活躍に期待を込めました。

飯山高校野球部
木村　徹 部長
Tohru Kimura

飯山地区奈良沢出身。社会科（現代社会）教師。15年前に統合前の飯山南高校に赴任。飯山南高校で4年、その後赴任した飯山北高校で3年野球部長を務めた後、監督に就任。統合した飯山高校でも監督を務め、昨年秋から部長に就任。

つらいとき、親や仲間のささえ「野球をやりたい」という強い思い

背番号1／投手
岡田（おかだ）　恵太（けいた）
学　年：3年
出身校：妙高高原中学校
投　打：左投げ・左打ち

4つ上のお兄さんの影響で、小学校1年から野球を始めました。中学2年のときにけがにより野球が1年ほどできなかったことがあり、つらい思いをしました。そんなときに、親や仲間の支えや、「野球をやりたい」という強い思いがあり、乗り越えたといいます。甲子園では、満員のアルプススタンドを見て、応援してくれている方の気持ちに応えたいという思いでプレーしたといいます。「ここまで導いてくれた皆さんに感謝したい。特に投手陣をみてくれた木村部長に甲子園に出場したことで恩返しができたのではないかと思う。」と胸の内を語りました。

「努力」と「楽しむこと」が大切だと感じています

背番号2／捕手
倉科（くらしな）　勇雅（ゆうが）
学　年：3年
出身校：城北中学校
投　打：右投げ・左打ち

小学校2年から野球を始めた倉科選手。小学校1年のときは、サッカーをしていましたが、高学年の先輩から「野球はおもしろいぞ。」と誘いを受け、またお父さんが少年野球の監督をしていたこともあり、野球を始めました。「小さいころから野球がうまかったというわけではない。努力すれば結果がついてくると実感した。」と振り返ります。また、「生徒も含め、多くの方が遠くまで熱い応援をしていただいた。」と感謝の気持ちを語りました。野球を通じて感じていることは、「努力することと、楽しむことが大事」と語りました。

このメンバーでできてよかった子どもたちに野球の楽しさ教えたい

背番号3／内野手
大川（おおかわ）　陸（りく）
学　年：3年
出身校：高社中学校
投　打：左投げ・左打ち

元高校球児のお父さんの勧めで野球を始めたのがきっかけで、小さいころからお父さんとキャッチボールをしていました。春の大会では初戦負けするなど、勝てる試合も勝てず、普段できることができないときがあり、自分たちのやってきたことがいいのか不安に感じたといいます。そんなとき、チームのメンバー一人ひとりと話をし、思いを聞いたこともあったそうです。「野球のおもしろいところは、一人ではできないところ。みんなとやれること。全員でアウトにもっていくところ。このメンバーでできてよかったと思う。今後は、子どもたちに野球の楽しさを教えたい。」と語りました。

地域の人たちには練習のときから支えていただいた　感謝したい

背番号4／内野手
若林（わかばやし）　陽生（ひお）
学　年：3年
出身校：山ノ内中学校
投　打：右投げ・右打ち

小学校2年から2つ上のお兄さんの影響で野球を始めた若林選手。甲子園を経験して、「人が多い中でプレーしたことがなかった。地に足がついていないような、自分の体をコントロールできていない感じだった。」と振り返ります。また、甲子園に出場できなかった岸田選手からバットを託され、このバットで打ちたいと思ったといいます。「地域の人たちには、練習のときから支えていただいた。感謝したい。野球は一人ではできない。この経験を活かし、今後、野球以外でも問題を一人で抱え込まず、チームプレーを大切にしていきたい。」と語りました。

支えてもらっているのを実感今後は支える立場として

背番号5／内野手
竹腰（たけこし）　友太（ゆうた）
学　年：3年
出身校：信大長野中学校
投　打：右投げ・右打ち

小学校5年から本格的に野球を始めたという竹腰選手。お父さんとキャッチボールをしていて野球に興味を持ちました。夢舞台の甲子園ではサードを守りました。「守備につくと、白いアルプススタンドが見え、スタンドの上まで人がいて、声援がすごかった。」と当時の様子を語ります。シートノックは緊張したが、出場してみると緊張というよりはワクワク感のほうが大きかったといいます。「多くの方の応援に感謝しないといけない。支えてもらっているのを実感した。今後は支える立場として、トレーナーになりたい。」と今後について語りました。

甲子園を目指す子どもたちへ「夢は夢で終わらない現実になる」

背番号６／内野手　石澤　太一（いしざわ　たいち）
学　年：３年
出身校：南宮中学校
投　打：右投げ・右打ち

野球を始めたのは小学校２年のとき、地域でチームのコーチをしていた方から誘われたことがきっかけです。得意とする守備と足を磨いてきたという石澤選手。憧れの甲子園でプレーし、「いまだに信じられない。ここまで来れたのはメンバーの仲が良かったから。」と分析します。甲子園のアルプススタンドが白く染まっているのを見て、今まで経験したことがない光景だったといいます。「苦しい場面もありましたが、ベンチ入りできなかった人たちの分までやり切らなくてはという思いがあった。野球をする子どもたちには、夢は夢で終わらない現実になるということを伝えたい。」と語りました。

できなかった甲子園初勝利　いつか果たしてほしい

背番号７／外野手　鈴木　悠平（すずき　ゆうへい）
学　年：３年
出身校：山ノ内中学校
投　打：右投げ・右打ち

野球を始めたのは、小学校２年のとき、４つ上のお兄さんが野球をしていたこともあり、好きになったという鈴木選手。以前からバッティングに自信があったといいます。甲子園では、４番を務めました。「甲子園の観客数が桁違い。ストライクやアウトのたびに歓声が上がり、球場全体で応援してくれている感じだった。」と振り返ります。また、「甲子園は、もう一度行きたいと思わせる特別な場所。何回も行きたくなる場所。自分たちができなかった甲子園初勝利をいつか果たしてほしい。」と次世代に期待を込めました。また、野球をとおして楽しむことの大切さを学んだと語りました。

アルプス雪が積もっているかのよう　皆さんの応援が力になりました

背番号８／外野手　小山　京介（こやま　きょうすけ）
学　年：３年
出身校：城南中学校
投　打：右投げ・右打ち

野球をしていた２つ上のお兄さんと元高校球児のお父さんの影響で小学校２年から野球を始めました。中学･高校と足のけがに悩まされましたが、がんばって野球を続けてきたといいます。「プレーするのも好きですが、高校やプロ野球を観戦するのも好きです。」という小山選手。甲子園でプレーしてみて、感動したといいます。「いつもテレビで見ている光景を体感して感動した。センターからアルプスを見ると雪が積もっているかのような感覚だった。ここまで来れたのも応援いただいたみなさんのおかげ。力になりました。」と感謝の気持ちを語りました。

朝早くからのお弁当づくり、費用面など、支えてくれた両親に感謝

背番号９／外野手　小林　昂聖（こばやし　こうせい）
学　年：３年
出身校：中野平中学校
投　打：右投げ・右打ち

ボールに触れ始めたのは４歳のときだったと小林選手。お父さんが少年野球のコーチだったのが野球を始めたきっかけだったといいます。中学生のときにけがで野球が１年ほどできなかった時期がありました。好きな野球ができないという不満があり、野球をやめようと思ったといいます。ここまで来れたのは、親の支えがあったからといいます。「甲子園では、観客が多く圧倒された。ここまで来たからには楽しみながら自分たちのプレーをしようと思った。朝早くからのお弁当づくり、費用面など今まで支えてくれた両親に感謝したい。」と胸の内を語りました。

あきらめず目標を見据え　最後までやりきることが大切

背番号10／投手　田原　大聖（たはら　たいせい）
学　年：３年
出身校：東北中学校
投　打：右投げ・右打ち

野球をやる中で、思うようなプレーができず嫌になったこともあるが、チームメイトと助け合って来れたと話す田原選手。憧れの甲子園のマウンドに立ってみて、360°見渡す限りの観客で、アルプススタンドは真っ白、今までにない雰囲気だったといいます。甲子園では、緊張はあまり感じず、楽しさのほうが勝っていたといいます。「野球は、１人ではできないスポーツ。誰かがミスをすれば誰かがフォローし助け合うもので、チーム全体で試合に臨む。勝てなくて苦しいこともあったが、あきらめず目標を見据えて最後までやりきることが大切。」と語りました。

全国レベル通用しなかった　でも　通用する部分あった　甲子園目指したい

背番号11／投手　常田　唯斗（ときだ　ゆいと）
学　年：２年
出身校：城南中学校
投　打：右投げ・右打ち

元高校球児のお父さんと小さいころからキャッチボールをしていて、野球に興味を持ったという常田選手。長野大会決勝では、延長10回にサヨナラのヒットを放ちました。「自分でもびっくりした。ヒットを打った後ベースを踏む前からみんながベンチから飛び出してきて、決まったんだなと実感した。」と当時の様子を語りました。甲子園では、自分の力について、今のレベルでは通用しないと感じたとともに、通用する部分もあったと話します。応援していただいた皆さんに感謝したうえ、「春・夏と甲子園を目指して頑張りたい。」と力を込めました。

みんなが甲子園を目指す理由が　わかった気がする

背番号12／捕手　若月　耀（わかつき　あきら）
学　年：３年
出身校：長野西部中学校
投　打：右投げ・右打ち

中学３年の後半から両親の実家がある飯山に住んでいる若月選手。小学校低学年から５つ上の兄の影響で野球を始めました。小学校からポジションはキャッチャーでした。長野大会、甲子園と経験し、みんなが甲子園を目指す理由がわかった気がするといいます。プレー一つ一つに湧く真っ白な応援席に感動したと語ります。今回の出場に際し、親戚中からメッセージをもらい、「地元がこんなに盛り上がってうれしかった。」と振り返ります。引き続き、飯山高校全体の応援をお願いしたいと語りました。

チームに貢献しようと自分にできること　精一杯やることができた

背番号13／内野手　岸田　大地（きしだ　だいち）
学　年：３年
出身校：城南中学校
投　打：右投げ・左打ち

お父さんとキャッチボールをしているうちに楽しみを感じ、小学校３年から野球を始めた岸田選手。長野大会では、初戦から決勝までファーストコーチャーを務め、投手の変化球を投げるときや、けん制する時などの癖を見つけ伝えました。甲子園ではアルプススタンドから応援した岸田選手。「出場できなかったのは残念だが、背番号４番の若林選手に自分のバットを託し使ってもらった。」といいます。応援してくれたたくさんの方へ感謝を述べ、「長野大会では、何かしらチームに貢献しようと自分にできることを精一杯やることができた。」と語りました。

洞察力、観察力など　この経験今後に生かしたい

背番号14／内野手　石渡　雄規（いしわた　ゆうき）
学　年：３年
出身校：中野平中学校
投　打：右投げ・両打ち

小学校3年から野球を始めましたが、当時はぜんそくで思うように練習ができなかったと石渡選手。その分、当時のコーチからいろいろな興味深いプレーを教えてもらい、見学していたといいます。長野大会では代走として出場しました。「野球は一人で全部できなくても1つ何かができることでチームに貢献できる。」と話します。甲子園ではアルプススタンドから応援した石渡選手。応援する立場にまわって、多くの人の支えでここまで来れたと実感したといいます。「野球を通じて、洞察力や観察力、細かい気づかい、指示される前に行動できるようになった。この経験を今後に生かしたい。」と語りました。

自分ではない誰かのために　行動すること 大切

背番号15／内野手　村松　諒（むらまつ　りょう）
学　年：３年
出身校：木島平中学校
投　打：右投げ・右打ち

小学校３年から地元の少年野球チームに入っていたという村松選手。小さいころから野球がうまかったわけではないといいます。子どもたちに、努力し続ければ夢が叶うということを伝えたいと語ります。「ここまで来れたのは、間違いなく自分だけの力ではありません。支援していただいたたくさんの方、メンバーを支えてくれた部員のおかげ。」と思いを語りました。村松選手は、この経験から自分ではない誰かのために、行動することが大切だと感じました。甲子園では、くやしい負け方をしたこともあり、今後も野球を続けたいと抱負を語りました。

多くの人の支えがあったから出場できた

背番号 16／内野手　学　年：3年
関　草太（せき　そうた）　出身校：長野北部中学校
投　打：右投げ・右打ち

保育園の時から、いとことプラスチックのバットとボールで遊んでいたという関選手。甲子園でセカンドで出場しグラウンドに立った際は、緊張というより興奮や楽しさのほうが大きかったといいます。「アルプススタンドから自分の名前を呼ぶ声が聞こえてうれしかった。多くの方の支えがあったから出場できた。」と感謝しました。また、メンバーみんなで甲子園出場ができたこと、目標を達成できたことに喜びを感じているといいます。「この経験をこれからの人生に生かしたい。」と今後について語りました。

失敗してもいい　向かっていくことが大切

背番号 17／外野手　学　年：3年
小林　祐太（こばやし　ゆうた）　出身校：高社中学校
投　打：右投げ・右打ち

チームのムードメーカーでもある小林選手は、メンバーの集中力やテンションを上げるため、ベンチの中で声が途切れないようにすることは大切と話します。甲子園では、代打で出場しました。「外野席の奥まで観客が入っていて、アルプスは白く、声援は長野大会よりも大きく、圧倒された。回を追うごとに声援が大きくなった。」と当時を思い出します。「野球をやめたくなることもあったが、やっぱり野球が好きというのは変わらなかった。甲子園で大敗したが、逃げ出すのではなく、失敗してもいいので向かっていくことが大切だと感じている。」と語りました。

多くの人の支えがあった　今度は自分が支えるようになりたい

背番号 18／外野手　学　年：3年
森　大河（もり　たいが）　出身校：木島平中学校
投　打：右投げ・両打ち

「野球のいいところは、勝った時も負けた時もみんなでわかち合えること。」と話す森選手。小さいころプラスチックのバットとボールでお父さん、親戚と遊んでいて野球に興味を持ったといいます。甲子園では途中からレフトを守りました。「出場できてうれしかった。1塁側の真っ白いアルプスを見たとき感動した。」と夢舞台に立ったときの様子を語ります。「自分たち以外にもたくさん応援してくれている人がいて、この人たちの支えがあったから自分たちがここまで来れたのだと実感しました。今度は自分が他の人たちを支えるようになりたい。」と今後について語りました。

豪雪地でも甲子園に行ける　甲子園は一番楽しくて成長できる

背番号 19／外野手　学　年：3年
伊東　壱真（いとう　いっしん）　出身校：城南中学校
投　打：右投げ・右打ち

ここまで野球を続けられたのは、両親とチームメイトの支えがあったからこそだと語る伊東選手。「長野大会で優勝できたのは信じられない。ずっと夢見ていたから。」と話します。甲子園では代打として夢舞台の打席に立ちました。「アルプススタンドが真っ白で感動し、意地でもボールに食らいついていこうと思った。」と振り返ります。野球をやっている子どもたちへは、「豪雪地でも甲子園に行ける。あきらめずに甲子園を目指しがんばってほしい。甲子園は一番楽しくて成長できる場所。」と語りました。

あきらめないこと仲間の大切さを学んだ

背番号 20／外野手　学　年：3年
青木　大地（あおき　だいち）　出身校：若穂中学校
投　打：右投げ・右打ち

小学校3年から野球をしている青木選手。小学校5年のときに、準決勝の大事な場面で自分のエラーで負けてしまい野球をやめたいと思ったことがあるといいます。それでもやめなかった理由は、野球が好きだからだと青木選手。昨年5月に左手首のけがをして1カ月ほど練習ができない期間があり、「その時は、練習を見ていると焦ってきて、野球をしたくてたまらなかった。」と振り返ります。甲子園では、途中から出場しました。「甲子園は実際よりも広く感じた。これまで野球をして、あきらめないこと、仲間の大切さを学んだ。今後に生かしたい。」と語りました。

野球で耐える力、仲間の大切さ知った

内野手　学　年：3年
松永 勇一朗（まつなが　ゆういちろう）　出身校：城北中学校
投　打：右投げ・左打ち

野球を始めたのは、小学校2年のとき、誰から言われるわけでもなく、お父さんが野球をしているのを見て興味を持ったと松永選手。高校1年の冬に膝のけがにより、半年以上、野球ができませんでした。「一時は選手マネージャーも考えた。でも仲間のあたたかい言葉に救われ、ここまで野球を続けることができた。」と話します。長野大会前の引退試合でホームランを打ち、チームに大きな影響を与えました。「失敗しても何も怖くない。そんな気持ちで打席に立った。何よりプレーしていて楽しかった。」と振り返ります。野球を通じて、耐える力と仲間の大切さを知ったと語りました。

練習から協力してくれた生徒 本番で応援していただいた方々　感謝しかありません

投手　学　年：3年
塚田　親悟（つかだ　しんご）　出身校：戸倉上山田中学校
投　打：左投げ・左打ち

野球を始めたのは小学校3年の時からで、中学からピッチャーだった塚田選手。高校1年生の時に腰を痛め、この夏の大会1カ月前に左ひじを痛め苦労したといいます。「これまでけがに悩まされたが、ここで諦めたら意味がないと思い野球を続けてきた。」と語ります。甲子園では、応援団長を務めました。選手をサポートするのも好きで、自分からやりたいという気持ちもあり、引き受けました。応援練習から協力をしてもらった生徒、そして本番の甲子園で応援していただいた方に対し、「感謝しかありません。最後まで全力で応援してくれたこと力になりました。」語りました。

病気で先のこと考えられなかった　励ましてくれたみんなに感謝したい

外野手　学　年：3年
小林　蓮（こばやし　れん）　出身校：南宮中学校
投　打：右投げ・左打ち

高校1年の冬に病気になり、その後長く車いす生活が続いたといいます。「その時は、野球どころかこの先のことを考えたくなかった。」と語ります。「2年の春、当時監督だった木村徹部長が家まで来てくれて『れんと野球がしたい。』と声をかけていただいた。その時、みんなと野球がしたい。甲子園に行きたいと強く思った。」と振り返ります。その後、心配して待っていてくれた仲間たちへの感謝を胸に治療とリハビリに専念し、グラウンドで野球ができるようになりました。「出場はできなかったが、優勝したときはうれしかった。励ましてくれた仲間に感謝したい。」と語りました。

自分の気持ち、すべて応援にぶつけました

投手　学　年：3年
山本　和希（やまもと　かずき）　出身校：城南中学校
投　打：右投げ・右打ち

高校では、けがに悩まされてきた山本選手。けがによる痛みや、そのことにより思い通りの野球ができないことで、たびたび野球をやめたいと思ったことがあったといいます。「家族の支えや、何よりみんなと野球をやっているのが楽しかったから続けられた。」と話します。「応援では、出場できなかった悔しさ、試合に勝ってもらいたいという気持ちをすべてぶつけました。甲子園が決まった瞬間、全身を使って飛び跳ね、塚田くんと抱き合い、喜びを分かち合いました。」と語りました。「今後は理学療法士を目指したい。野球を通してやりたいことができた。」と語りました。

7/21、同じユニホームで駆け付けた快挙に喜ぶ飯山高校野球部OB（上）と全国大会出場を飯山高校の正門前で立派に報告する選手たち（左）

飯山高等學校々歌

田井安曇作詞
佐藤眞作曲

峡の門の南の方の
走り出のよろしさ山は
懐かしき高社山
やすらぎは母の膝なり
若き子をひたに迎へ
おゝ栄えあれ飯山高等學校

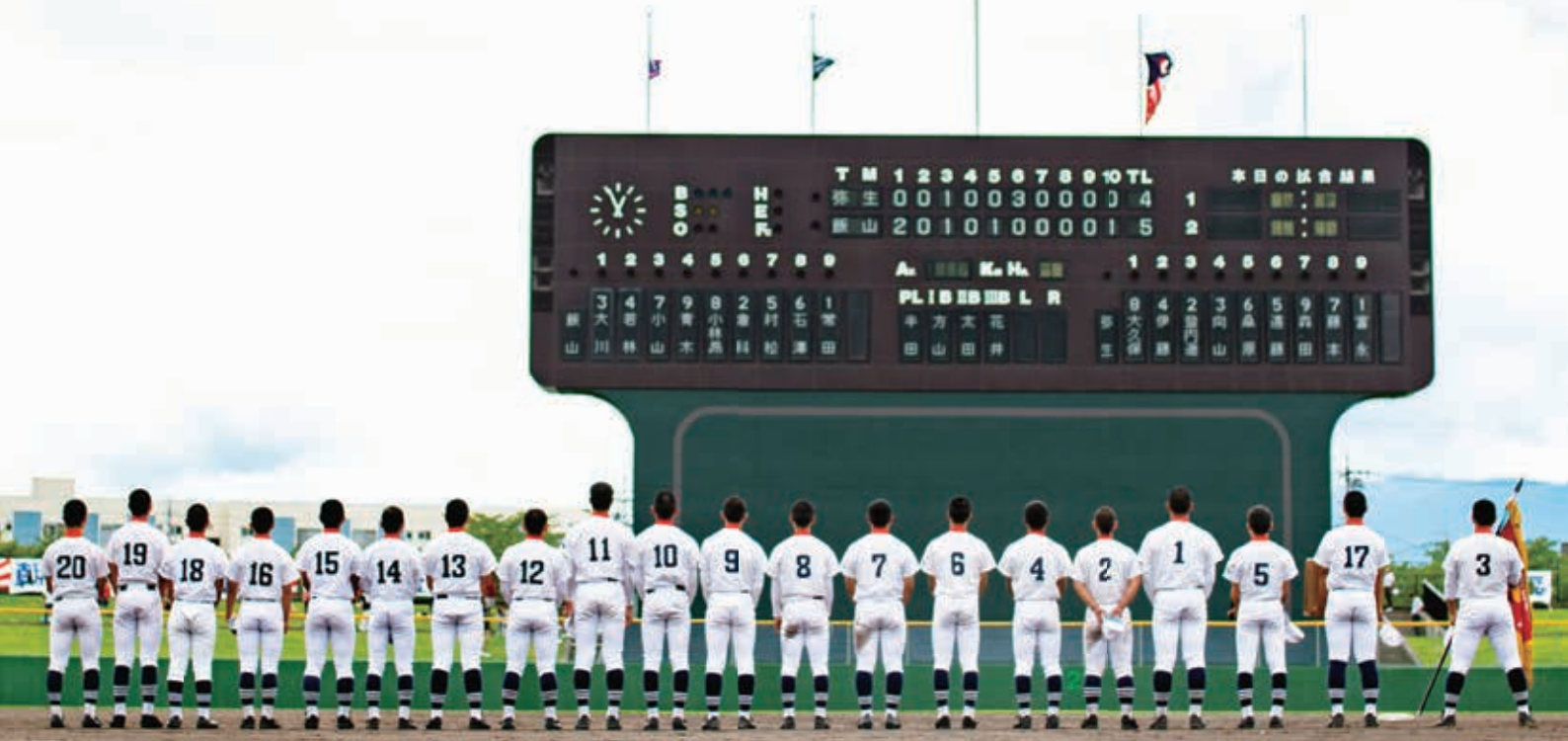
千曲川　透る瀬となり
また淀み　信濃の水の
大方を北に導く
百里行き海に注ぎ
遊く水は嘆くことなし
おゝ栄えあれ飯山高等學校

寂かなるこの地に生れ
深雪にも耐へて育てば
信濃子は強く真ますぐ
何事か必ず遂げむ
われら皆志あり
おゝ栄えあれ飯山高等學校

真信濃　城下の町に
学べよと貧しき中ゆ
郷びは学舎を設けぬ
知の拠り処　桂を植ゑ
われらの樹　桂を植ゑぬ
おゝ栄えあれ飯山高等學校

百年に桂は育ち
水芭蕉　雪　と伴なひ
新しき首途を迎う
ねがはくば　この樹の伸びて
雲に触れ　天を蔽へよ
おゝ栄えあれ飯山高等學校

いざゆけ若き飯山高等學校



広報飯山
9月号特集　別冊
「雪国から甲子園へ」

発　行：令和元年9月15日
発行人：飯山市長 足立正則
編　集：飯山市役所 総務部
事業戦略室 情報政策係
印刷製本：有限会社 足立印刷所

〒389-2292 長野県飯山市大字飯山1110番地1号
☎0269（62）3111（代）／fax（62）5990
https://www.city.iiyama.nagano.jp/
senryaku@city.iiyama.nagano.jp

マチイロ
「広報飯山」をいつもそばに。
App Store からダウンロード
Google Play で手に入れよう